

## 主張

### 1 経済自由化への道

政党の政策というともとも得票をねらう臭味をもっているので、一般に毛嫌いされるかそうでなくとも顔面通り受取ってくれない怨みがある。また事実そういう体臭をもっていることも争えない。しかしそうかといって、この政党の掲げる政策以外に実効性をもった政策はなく、この政策によってわれわれの生活や大きくいって運命にも影響が及ぶのであるから、これを軽視することはみずからの生活や運命に忠実である所以ではない。

自由民主党は申すまでもなく現在日本における政権をになう唯一無二の公党である。二大政党とはいうけれども、一方の日本社会党は、その力量と信用から判断して政権にありつくには、なお相当の距離が見られる現在、良かれ悪しかれ、自由民主党は相当長きにわたって、日本国民の

運命をになわなければならぬ公党である。してみれば自由民主党という政党は今日の日本国民にとって他者としての客観的な存在ではなく、余りにも身近な存在であるはずである。したがってその考え方や、またその掲げる政策に無関心であつてよい道理はない。

しからばその自由民主党はどういう政策を掲げて実現に努力しているかというところ、これは多岐にわたり複雑であつて、簡単に論じ尽されぬから、ここではその経済政策の根本について、その考え方を少しばかり掘り下げて吟味してみたい。自民党の経済政策は、一口にいえば国際的には自由国家群とりわけアメリカとの協力を一つの極とし、国内的には自由企業制度を基調とする諸施策を他の極として、展開されているように一般に理解されているし、その理解は大筋において確かに正しいといえる。

ところが他面において、自民党は独占資本に奉仕する大企業偏重の政策を固執し、働く者の敵であるというような公式的かつ敵意に満ちた宣伝がなされていることも事実である。そこで私は前段の正しい理解をもっと掘り下げて一層高度の理解を促すと同時に、後段の独断的な言評に対してはわれわれの立場を明らかにしつつ、自民党の政策の嚮導理念を確かめてみることにする。

自由国家群特に米國との協力関係は、日本の立地や経済の構造に即した自然の道であり、それだけにまた歴史的なものでもある。したがってこの立場は、われわれがその時の都合や好悪の感

情によつて勝手に取捨選択できるようなものではなく、ある意味において抜きさしならぬ宿命でさえあるといつてもあえて過言ではあるまい。

日本の現在の輸出入の構成を見ても、日本經濟の原材料の安定した供給と、日本商品の安定した市場は圧倒的にこの地域に依存している。かつてわが国が滿州その他支那大陸にその勢力圏を確保して、その地域に対する貿易や投資關係が軍事行動と並行して極めて活発であつた時期においてさえも、大陸貿易に対する日本貿易の依存率が二五パーセントを超えたことはなかつた。しかもそれは經濟性を無視し軍事を偏重したもので、自然の成行というものではなく、いわば無理に背伸びしたものであつた。

わが国の經濟の高度のかつ安定した構造を支え、その國民生活を高い水準に維持してゆく上からいって、自由國家群との協力はわが國經濟にとつては何といつても致命的な要請である。大陸市場の価値を高く評価する者でも、この根本の要請を無視してはいないようである。彼らはただこの自由國家群との協力關係による受益を当然のこととしてそのまま受け取つておいて、さらにその上に大陸市場の価値を機械的に付加してゆこうといふいわば虫のよい想定に基づいておられるかと思えない。また大陸が日本と地理的に近接していることを自明の利益として強調するが、これは大陸に賦存する資源の日本經濟の現実に即した效用分析を怠つたり、あるいは大陸における

内陸交通のコストや港湾の能力等を勘定に容れていない素朴な議論であるように思われる。

経済に飛躍はない。日本経済の構造は、自由諸国家における資源の供給力とその地域における住民の生産と消費の様式や水準との関連においてきずかれています。これは無造作に切替えの効くものではない。日本の外交が、その根本においてかかる経済関係をふまえて推進され、またそうしなければならぬ理由もここにあるわけである。そうした自由圏との協力を推し進めてゆくためには、先方の自由化を求めざるばかりでなく、わが国の経済、とりわけ貿易、為替さらには資本の自由化を及ぶ限り進めてゆかねばならない。

しかし自由は放縦と弱肉強食に通ずるとして、自由主義的な経済政策の罪悪を責める向きが多い。しかし自由が自由たり得るためにはその根底に節度と責任が伴うものである。自由は本来経済主体のヴァイタリティを解放し経済の動脈硬化を救うものである。歴史はその事実を示している。西独経済復興の奇跡は、ドイツ国民の優秀さによることよりも、政府が開放的な市場経済に踏みきった勇断の中により多くかくされていると見るべきだ。問題はむしろ経済活動の中に、如何にして公正な自由を確保するかである。これには余程勇氣と英断が必要であり、計画や統制との安価な妥協をはかることをこそいっそう警戒すべきではなからうか。弱肉強食を抑えることは望ましい。そのことは政策の立案とその実行に当って、われわれが最も留意しなければならない

ことである。しかし、そのために貧血した計画と統制を招き、すべての者のプロレタリア化をもたらすことになることは誠に警戒しなければならない。歴史はそのことを示している。しかもプロレタリア化した人々の生活を保障するためには、いわゆるソーシャル・セキュリティが必要になってくるが、それを可能にする財政的源泉を、そのために涸渇してしまい、遂には人間を豚の群と同様の境涯に追いやることになりかねない消息も、看逃してはなるまい。

われわれの経済政策は価格のメカニズムをできるだけ流動的に機能させることを根幹としている。なるほど米とか公企業料金についてこれに背馳した措置をとってはいるものの、これはあくまでも例外であり過渡的なものである。なるべく早くこの種の統制は改廃してゆかねばならない。政策の立案とその遂行、さらにはそのメリット判定の公準は何としても価格にあるからである。百年前、一人の天才マルクスが、当時の環境の下で描いた自由な資本主義、就中イギリスのそれに対するベシミスティックな展望は、確かに多くの人々の心を捉えた。しかしその後の自由経済の示した遅しい生命力は、その天才の予言をほぼ完全に裏切つて前進を続けてきた。歴史における現実の實踐はその予言とはおよそかけ離れた展開を示したのである。今日に至つてなおこの予言を金科玉条として信奉することは、非科学的であるのみならず、一つの新しい宗教に帰依したものの所作としてか、あるいは一つの戦術的な手段としてしか受取れないのではあるまいか。

日本の現実をみて、財閥や地主資本の解体が行なわれ、所有の分散度は他国にその比を見ない程度に実現された。また大衆の零細な蓄積は、証券という手段を通して巨大な企業資本に化体し、そこかしこに機能している。またそれを支配経営する人々はマネジャーとして、その企業体に生涯の浮沈を委ねて嘗々と働いている。この新しい経済の官僚の性格と役割は、政府の官僚や労組の専従官僚と同様にそれ自体近代社会の大きな問題ではあるが、しかし、この経済官僚に対して独占資本家のレッテルをはるのは、分散された株主大衆に同じレッテルをはるのと同様に乱暴な押しつけであるといわなければなるまい。

そしてこの資本の集中が必然の道行として経済における寡頭支配を生み、中産階級の没落と大衆の窮乏化をもたらすという予言は事実によって裏切られた。アメリカにおいても中小規模の企業が、動力源の運搬が容易になってきたことや、第三次産業の勃興（アメリカの国民所得の五〇%以上は、事実サーヴィス業による所得で占められている）を通して、数においても比重においても増大しつつある。大企業の多くは組立工程だけを受持ち、残余の工程は中小の下請に依存するようになった。そしてそれは独りアメリカのみの現象ではない。わが国においても経営内部における人間管理の限界から、すでに大企業は経済性の壁に突き当り、企業の分散と適正規模化が進行しつつある現実も看過されてはならない。

民主主義というものは中央地方を通ずる民主議会ができ上り、これが機能することによつてのみ確立するものでも結実するものでもない。要はその構成員一人一人が眞の自由を自覚し責任を果すところから出発するものである。そのためには集団に寄生したさすらい人の寄り集るところには眞の民主主義は育たないものである。祖先も自分で祀るが子孫のことも自分で考えるという人間を土台として結実するのが民主主義であつて、機械の部品のように個性を失つたドライな人間を核心として民主主義は開花できるものではない。われわれはプロレタリアを無くするところに道標をおいて、人間性に立脚した経済政策を推し進めようとしているのである。そしてその課題は、神を僭称する中央からの計画や命令による安易なやり方では解決はおろか、事實はその逆の結果を生むことになる。その解決への道はけわしくはあるが、各人の自由と責任を重んずるという立場に立つ地道な精進をすることによつてのみ開かれてくるものである。

しかしわれわれの敵は、貧血した計画や統制ばかりではない。計画や統制と安価に妥協しようとするわれわれの精神もまた、前者に劣らずわれわれの敵である。今日の貿易や為替、さらには金利や価格の自由化を阻む者が、計画や統制を鼓吹する徒輩といわんよりも、むしろ官民の間に巢喰う現状維持論者である場合が少なしとしない。例えば、今日の農村の近代化とその前進を阻む者が、革新を名乗る勢力ばかりでなく、農村社会の現状維持論者や農業団体や農林省である場

合がないとはいえない消息も一考に値することである。

今日、革新の名において行なわれている主張は、人間を窮極においてプロレタリアに化し、機械の部品に化し、これを奴隷化することになる危険をはらんでいないとは断言できない。そしてその奴隷化への道は案外容易な道でさえある。特別に勇氣と英断を必要としない。しかしわれわれが主張する自由化への道は、かえってけわしい道であり、それだけにより大きい勇氣と英断と不断の精力的努力が要請されている。これこそ眞の革新の名に値する革新であるといえよう。

自民党の今日の局面における問題は、その經濟政策にいうところの進歩的革新約装いをこらすということにはない。むしろ經濟の自由化を阻んでいる各種の既存の装置を次々と勇氣をもつてとり外してゆくことではなければならない。各種の立法措置や行政措置は、その限りにおいてのみその存在理由が許されるという新たな決意と英断をもつことである。

現実の自民党の政策の全部が、そういう方向に必ずしも沿っているとはいえないであらう。また政策立案に当り、ともすれば、その方向と背馳する方向に走ろうとする誘惑を感じる場合も少なくはない。しかし、それは現代人の救いの道に通ずるものでないことを深く銘記しつつ、勇氣をもつてけわしい自由化への道を地道にかつ順序よく踏みしめて前進することが、われわれの課題であらう。